Gula

豚小屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｇｕｌａ

【Ｎコード】
Ｎ５１３５ＢＡ

【作者名】
豚小屋

【あらすじ】
所詮は豚の妄想です。

これは以前、とあるサイトの雑談板で書かせてもらったものです。

とりあえずこれを読んで　ご自分に合うかどうか試してみてください。

（前書き）

とある動画サイトにて投稿されたとある動画を、これまたとあるゲームのキャラと豚の脳内にいる性別不明のキャラでやってみたものです。

引き返すなら今のうち。

※これより下へいくと皆様のお目を大変汚してしまいます。場合によっては気分を害されるかもしれません。その覚悟があるお方のみ下へお降りください。

某動画サイト中毒の豚はこんなことを妄想してみた。
ホントはやっちゃいけないんだろうということは自覚済みです。
でも。やってはいけないことほどやりたくなるっていうじゃないですか。
それにやらないで後悔するよりもやって後悔する方がいいとも言いますし。
ねぇ？そこのあなただって…そうでしょう？

ここはとある舘。
豪勢な造りから分かるように、さる貴きお方のものでございます。

ただ、少々申し上げにくいのですが…。

あぁ、もうすでにお気づきになられておられましょうが。

この舘、少々臭います。

人によってはご気分を害されますし、生理的に受け付けない方もおられます。

ですが稀に、甘美な、忘れようにも忘れられない、麻薬のような芳しい香りと仰る方もおられました。

ワタクシのような語彙の乏しい者はただ『腐臭』と申し上げることしかできないのですが。

ここは腐臭が漂う背徳の舘。

それでは皆様。

しばし、お付き合いくださいませ。

―さぁ、残さず食べなさい―

今宵も始まる晩餐。

紅いベルベットのクロスを敷いた、本来は多人数での使用が目的と

されている大きなゴシック調のテーブルの上。
おびただしい数の料理が並んでいる。
それを食いあさる者が一人…。
「足りないよー。もっと持ってきてー」
彼の者はこの一帯を治める貴族の末裔にして美食家。古今東西ありとあらゆる料理を食し、この世の美食を極めたとさえいわれている。
ただ…
「はーい。少々お待ちくださーい」
「次のメニューはー？」
「猿の肝臓のソテー　豚の脳ソースあえだ」
「早く早くー」
「デザートは美春特製のクレープです。中身は…食べてからのお楽しみですよー♪」
「美春さん、アレ使ったのかい？」
「言っちゃダメですよ？」
「なんだっていいよー。もっともっと食べられるならねー」

美食を極めてしまったが故に並大抵のものでは満足できなくなってしまった。

何を食べても満たされない。

しかし食べなければもっと満たされない。

――――――ジレンマ

その果てに彼の者が辿り着いたのは逸脱した悦楽。

常人には理解できない、理解したくもない味覚。

――――『悪食』――――

「何かなー？この青白いのー」

「コックの秘密の隠し味とのことだ」

「ふーん。まぁなんだっていいやー」

「ご主人様、次の料理をお持ちしましたよ」

「じゃんじゃん並べて並べちゃってー」

量にして何人前だろうか。

おそらく民の一日分の食料が彼の者の一回の食事に消費される。
毎日の食事がこの有り様。よくもまぁ体を壊さないものだ。
「ご主人様、そろそろ食事を切り上げてはいかがだろうか」
召使は自らの主の体を心配する。従者としては当たり前の心構えではあるが、この召使も例に漏れず。
召使の口から出たのは、主人の体を気遣っての言葉だったのだが。
「ウルサイヨ」
先ほどとは一変し底冷えするような冷たい声。
全てを平伏させるような威圧感。
思わず畏縮してしまった召使を誰が責められようか。
「邪魔スル気？」
「…いえ、差し出がましいマネだった。お許しを」
「じゃあ次の料理持ってきて」
「少々お待ちを」
聞き入られることもなく引き下がり、また厨房へ料理を取りに行く。

その間メイドなどは
「ご主人様はたくさん食べるんですねー」
などとのたまっていた。
―晩餐はまだまだ終わらない―

「ごちそうさまー」
あれから。
幾度も運ばれてくる料理を残さず平らげていた。
ようやく腹も落ち着いたのか“とりあえず”食事は終わったようだ。
しかしあれだけ食べているにも関わらず主の体はか細く。体型は一向に変わる気配がない。
「明日もこの調子で頼むよー」
数時間、間断無く食べ続けて。
それでもまだ食べようというのだから底知れない食欲だ。
主がこのあとすることといえば、自室に戻って眠ることだけ。
「主人」

踵を返して部屋へ向かう主を引き留めたのは召使でもなく、メイドでもなく、

「少し話があるのだが」

この舘の厨房を一手に担う専属のコックだった。

呼び止められた主は別段煩わしそうな表情でもなく、コックと顔を合わせる。

「なぁにー？」

主は自身よりも身長の高いコックを見上げる形で。コックは自身よりも低い位置にある主の目を見ている。

「そろそろ休暇を貰いたいのだ」

「確かキミ、体力には自信があるんでしょー」

「それはそうだが何事にも限界がある。それに貴方に仕えてから一度も暇を貰ったことがないのだ」

「そうだったっけー？」

小首をかしげる主の姿は無邪気なものだった。

この舘に招かれてから今に至るまでのコックの記憶の中で、休んだといえるのは眠るときだけだ。

日に日に食欲を増す主のために一日中料理を作り続け、休憩時間さえも主の次の食事のための準備に費やされ、夜は次の日の仕込みで遅くまで起きていなければならない。

今までよく倒れなかったものだとコック自身思う。

「さすがに休暇を貰わなければ体がもたない。どうか頼めないだろうか」

主はずっとコックを見続けていた。確かに頬はこけ、心なしかやつれたように見える。しばらく見続けた後、

「イイヨ」

とだけ言ってコックを下がらせる。ようやく暇を貰えたコックは主に一礼し、嬉々として厨房へ戻った。

コックは気付いていない。

主の目がずっと自身を捉えていたことに。

主の自分を見る目が人を見る目ではなかったことに。

「真白、美春ちゃん」

「はい」

「はい？」

そして今度は朗らかな笑みを浮かべて。

「お願いネ」

「お任せを」

「はぁーい」

恭しく一礼する召使と太陽のような笑顔を浮かべたメイドは主とは反対に向かう。

そして主はようやく踵を返し自室へと戻っていく。

「まったく…、使エナイ奴バッカ」

―笑顔―

「ご主人様、お食事の準備が出来たよ」

「すぐに行くよー」

喜色満面。

まさしくその言葉通りの表情を浮かべて食事の席へ向かう。

「今日のメニューは特別ですよー」

テーブルのそばで主を待っていたメイドの笑顔は相変わらず太陽のようだ。

主は笑顔を崩さずワインを飲み干す。

「前菜はー？」

「黒いパスタのサラダだ」

「サラダかー、ちょうどいいねー」

みずみずしい緑野菜の上に被さる真っ黒な細長い麺。

普通なら抵抗を感じそうなものだが、主にとってそれは食欲を掻き立てる極上の食材でしかない。

――失礼しまーす――

「うーん、でりしゃすー」

口一杯に頬張り笑みが一層強くなる。

味付けは文句無しのようだ。

――駄目じゃないですか杉並さん。ご主人様のご機嫌損ねちゃー――

「次の皿はー？」

「特製のスープでーす。熱いから気をつけてくださいね」

純銀製のスプーンでスープを掬って口へ運ぶ。そして再び顔には笑み。

――貴方で１５人目――

「この背肉の香草焼きもさっぱりしてていくらでも食べられるねー」

「それは何よりだ」

――今年に入ってこの舘に雇われた料理人は貴方で１５人目だ――

「あはは、ははははー」

小皿に取り分けることすら煩わしいのか。

メインディッシュ『胸肉と中落ちのロースト』を直接ナイフで切り取り口へ運ぶ。

濃厚な味と、噛めば口の中一杯に広がる肉汁に至福を覚える。

もはや眼前の肉の塊以外に興味は微塵もない様子だ。

――貴方はご主人様の怒りに触れた――

「もう、この、美味しさは別格だよー」

――裏切り者には――

「んはははは、あハハはハはー」

――報いを受けていただきましょー――

「はふぅ」

全ての料理を食べ尽くし。

主は満足そうな顔を―

「次の料理はー？」

―するはずがなかった。

「申し訳ありませーん。食材は全部使いきっちゃったんですよ」

「明日また極上の食材をご用意させていただくので我慢を」

アレでは主の飽くなき食欲を満たすには足りなかった。

明日は更に量を増やさないと。

メイドは心の中で呟く。

所詮、あの男では主を満たすことなど最初から無理だったか。
召使はさして感慨に浸ることもなく思った。
2人がそんな益体もない考えを巡らせている間。主はずっと自分の従者達を見つめ続けていた。

「…美春ちゃん」

「はい？」

「美春ちゃんてさー」

主はメイドを見ながら、

「美味しそうだよねー」

笑顔で言った。

「もーぅ、ヤですねご主人様。美春がいくら可愛いからってそんなー」

頬に手を当ててくねくねと身をよじらせるメイドを見続けていた主は召使へと視線を移す。

「真白もさー」

「なにか？」

「ねー？」

「ねー？と仰られて…も」

気付いた。

気付いてしまった。

気付きたくはなかったが。

気付いてしまっていた。

主の顔。

主の目。

主の笑み。

あのときと同じ。

あのコックを見ていたときと同じ。

“あのコックを見ていたときと同じ目で自分達を見ている”

気付いたときにはすでに遅く。

先程まで照れていたメイドも今や竦み上がってしまっている。

動けない。

あの威圧感。

全てを平伏させるような絶対的な威圧感。

その瞬間。

次に何が起こるのかを理解した召使は自分の聡明さを恨み。

次に何が起こるのか気付いたメイドは決して悪くはない自分の勘を呪った。

主はゆっくりと、優雅に2人に近づいて。

2人の頬に手を添えて。

「アナタ　ハ　ドンナ　アジ　ガ　スルノカナ？」

囁った。

「あ～あ、お腹空いたなー」

一人呟いて。

しかし返ってくるものはない。

いつしか舘はもぬけの殻。

何もない。

誰ももういない。

それでも。

「何か無いかなぁー…」

彼の者は求め続けた。

「…美味しそうなもの無いかなあぁアぁァあァア！！」

究極にして至高の『悪食』

叫びと共に振り上げた両腕を一切の手加減なくテーブルに叩きつける。

紅いベルベットのクロスを敷いた、本来は多人数での使用が目的とされている大きなゴシック調の―頑丈に出来ているはずの―テーブルは、あっさりと。呆気なく。味気なく。凄まじい音を立てて。真ん中からへし折れていた。

主自身は腕を降り下ろしたその勢いを止めないまま、へし折れたテーブルと共に床に倒れ込む。

そしてそのまま動かなくなった。

しばらくして。

館中に響き渡っていた激しい音が鳴り止んだあとも。

主は突っ伏したままピクリとも動かなかった。

上下する背中から息をしていることは分かる。
しかし髪に隠れてその表情は窺えない。
ただ一言だけ。
「残したら、怒られちゃうもん…」
誰の耳にも入ることはない呟きは。
やはり誰の耳にも入ることはなかった。

突っ伏したままの主の視線は定まっていない。
というより、とめどなく目を動かしているだけのようだ。
床を見て。
壊れたテーブルを見て。
そして自らの右手を見た。
先程テーブルに叩きつけたせいだろう。その手からは赤い紅い鮮血が流れ出ている。
視線は赤く染まった右手から離れなかった。

じーっと。じぃーっと。

あのときと同じ目で。

コックを見ていたあのときと同じ目で。

召使を見ていたあのときと同じ目で。

メイドを見ていたあのときと同じ目で。

自らの右手を見て。

ゆっくりと起き上がり。

そして静かに微笑んだ。

「マダ　タベルモノ　アルジャナイ」

そして主は――

舘の主の最後の悪食。

その食材は彼の者自身でした。

食を極めたその体の味はいかばかりか。それを知るものはすでにおりません。

おや。もうこんな時間になっていましたか。

お付き合い頂いた皆様方には深く感謝しております。

ここはいつでも皆様方のご来場を歓迎しております故、いつでもいらしてくださいませ。

またお目にかかれることを願っております。

お帰りの際はお足元にお気をつけて。

それでは。

（後書き）

元ネタ

ニコニコ動画　悪ノP様より
「悪食娘コンチータ」

D．C．より　某わん娘

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5135ba/

Gula

2012年1月14日05時48分発行